# 英語論文のチェックポイント

2017.9.30 青木宣明

- ■ スペルチェックをかけたか？（画像中は別途自分でチェックする）
- ■ 主語と述語は対応しているか？
  - ➢ 主語または述語（動詞）が抜けていないか
  - ➢ 主語と述語の数が対応しているか
  - ➢ 主語が 3 人称単数なら動詞に s を付ける
- ■ 品詞に対応した使い方をしているか？
  - ➢ 副詞は文全体を修飾できるが，形容詞はできない（例：based on や due to は形容詞，be based on や名詞＋based on で使う）
  - ➢ 副詞で文と文をつなぐことはでない（例：A，but B. は OK だが A, however B. はダメ）
- ■ 名詞は数えられるかどうかをまず確認する。
  - ➢ 数えられない場合，特定された概念なら the を付ける
  - ➢ 数えられる場合，単数か複数かを次に確認する
    - ✧ 単数なら必ず a か the が付くことになる，**読者にとって特定できている対象**なら the をつける，はじめてなら a になる
    - ✧ 複数の場合，特定できるグループを指す場合だけ the を付ける
- ■ 同じ単語を一文で 2 回以上使わない，できれば連続した文でも使わない（表現が単調になるのを英語は嫌う，口頭発表は連続しても OK）。
  - ➢ ただし研究の主題となる概念の表現には一貫性をもたせる
- ■ まわりくどい表現はカットする（it is ～ to ……, it ～ that, there is/are，can be possible（助動詞をむやみに使わない））。
- ■ 物事に対する制限用法の関係代名詞は that，非制限用法は which を用いる。
- ■ 関係代名詞＋be 動詞はカットできないか確認する。

■ 誤解を避け読みやすくするために，関係代名詞は直前の名詞を修飾するようにする。非制限用法（, which）はコンマの前全体に係るようにもできるが，わかりにくくなる可能性が高いので避ける。

■ 極力能動態で文章を書くとシンプルで力強い文章になる。

■ **物事を主語**にすることできる（無生物主語），その**主語を「原因」**のように表現し，**述語（動詞）で作用の結果**を書くと英語らしくなる。

■ 前後の文のつながりがはっきりしていると理解しやすくなる。できるだけ**段落のトピックを主語**にし（トピックを表現する語は連続して用いていい），トピックを**展開する内容を述語**にもってくる。

■ **一つの文で一つのこと**だけを述べる。**あれこれ 1 文で言おうとすると文が複雑になって文法ミスにつながるし，内容や論理の飛躍が起きやすくもなる。**長く感じる上に読み返してみてわかりにくい，文法や表現がおかしいと感じる文は**二つ以上に分ける**とよい。または内容の飛躍を感じるならそれを補う文を加える。

■ 英語は日本語以上に論理に飛躍があると不自然になる。論理展開を英語にするのはとても難しい。慣れないうちは**短い日本語の文を並べて論理に飛躍がない展開を先に考えておき**，その日本語を**短い複数の英文**に置き換えて論理を説明するつもりでいるといい。

- A は B という特徴がある。C を検討することで D を明らかにする。
  →読み手に話題が急に変わるように感じさせてしまう。二つの文の間に（A または B）と（C または D）を含む**文を加えて内容をつなぐ**必要がある。
- A は B の性質があって，その結果 D になる。
  →A は B の性質がある。B は C につながる。C は D を引き起こす。よって A は D の原因である。
  （変更前だと C が飛んでいる，**書く側には C が当然のことで書いていなくても不自然に感じない場合に起こりやすい**，しかし読み

手には C がないと話のつながりがわからないこともある）

■ 似たような動詞でも意味が違う，状況にぴったり合う動詞を使う。

- 「明らかにする」は clarify にしたくなるが，これは意味が弱い
- 測定して値が「明らかになる＝特定される」は，一般的な測定なら measure，個別の測定点なら determine を使う
- 原因の特定にも determine や identify が使える

■ 接続語が正しく使えているか確認する。

- on the other hand は**同じ主題**について**対立する性質**をもつ観点を並べるときにしか使えない，主題が異なる対比なら in contrast, unlike, but, whereas を使う（文脈に合う表現を選ぼう）
- therefore = for this reason, in this way/manner, as a result（はっきりとした理由が直前にくるときに使う）
- thus = in this way, with this result（for this reason の意味はもたない），as a (necessary) result（この意味では therefore, hence に比べて thus が最も強い表現，必然性・直接的な因果関係の表現に向いている）
- hence = from this source/origin, because of a preceding fact, as a result, as an influence/deduction（この意味では hence が最も強い表現，論理的な脈絡の表現に向いている）

■ 否定文は意味があいまいになりやすいので具体的な意味をもつ肯定文に置き換える。

■ 直接比較できるもの同士で比較をしているか？たとえば，The density of water is higher than ethanol. は誤りである。正しくは，The density of water is higher than **that of** ethanol. となる。

■ 比較の意味をもつ表現を重複して使っていないか？比較級と compare は同時には使わない。

■ 比較級を使うときは比べている二者を一つの文に示しているか？
「比較対象は？」と読者に疑問をもたせてしまところはないか？

■ 比較や関係性の意味含むときに both を使っていないか？二つの値の等号関係（$a = b$）を述べるときは Both values are equivalent. ではなく，**The two** values are equivalent. とする必要がある。

■ 和英辞典以外の辞典も使おう。

- 英英辞典，類語辞典 https://www.merriam-webster.com/
- 活用辞典（名詞と前置詞，動詞と前置詞，名詞と形容詞といった単語と単語の組み合わせが載っている）
  例：新編　英和活用大辞典　研究社，Oxford Collocations Dictionary for Students of English (2nd Ed.)

■ より英語論文の書き方の学びを深めるための教材選びのヒントに『英語論文の書き方・英語プレゼンの学習法』も用意している。
http://panoramic-view.info/pdf/English-study-for-DrCourse.pdf